

「誰が偉いか」

2014年09月29日

マルコによる福音書9章33節～37節。一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

主イエスの目はエルサレムに向かい、心は死を決意していた。十字架と復活について二度目の予告をされた。その直後、上記の会話がなされた。弟子たちは主イエスの話を全く聞いていなかった。聞く耳を持っていなかった。マルコ福音書の著者は主イエスの歩みと弟子たちの願いは真逆であったと伝えている。

主イエスと弟子たちの一行は、最初の宣教地カファルナウムに立ち寄ったが、その途中、弟子たちは盛んに議論をしていた。主イエスは家に着いてから、「何を議論していたのか」と尋ねた。議論の内容はご存じであっただろうが、あえて聞いてみた。弟子たちは黙りこくってしまった。自分たちの間で、誰が一番偉いかと議論していたからである。主イエスはエルサレムに上り、革命を起こし、イスラエルを解放し、王になられる。その時、それぞれはどの地位を得られるかと、むき出しの野心について議論していたことを、さすがに恥じて、答えることができなかった。先ほど、死と復活について予告したばかりであったが、耳に入っていなかった。主イエスの深い孤独を思う。

主イエスは座って、弟子たちに「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」と諭された。そして、子どもを抱き上げ、私の名のために、子どもの一人を受け入れる者は私を受け入れるのであり、私を受け入れる者は私を遣わされた方を受け入れるのであると話された。子どもは小さく、弱い存在である。弱者を愛する者は主イエスと共にあり、神の中にある。イギリスの神学者P・T・フォーサイスは「神の愛は偏愛である」と書いている。神の愛は小さく、弱い者に向けられている。

主イエスは捨て置かれた者に目を留め、神の恵みと祝福の中にあると、彼らの生を限りなく愛された。今、罪人のために、罪を赦し神と和解させるために、自らの命を捧げようとしている。その最中に、弟子たちは偉くなり、高い地位に着きたいと野心に燃えていた。

しかし、弟子たちを笑えるか。弟子たちの思いは人の常である。人は皆、少しでも上に認められたいともがいている。それのみを求めていると言ってもいい。主イエスの十字架の死による赦しに与っていると信じている者たちの間でも、そうである。教会の中で、牧師たちの間で、この醜悪を見てきた。私自身も否定されると無性に腹が立ち、見え透いたお世辞に顔がほころぶ醜態を、幾度、晒したことか。

現在、未来を望むことができない、社会的に弱くさせられた人々が大量にいる。彼らに生きる希望を持たせるような人が、主イエスが言われる「後の人、仕える者」ではないか。時代の苦悩を負い、自らを律し、鍛錬する者が主イエスの弟子であらう。